

巻頭言

人間学研究所シンポジウム(2012年度～2013年度)の企図

京都文教大学人間学研究所所長 依田 博

京都文教大学人間学研究所2012-2013年度のシンポジウムは、人間の性、育児、歩行、教育をとりあげる。それぞれのタイトルは、

- (1)人類の始まりとしての性文化
- (2)幼児期における音楽環境
- (3)人類にとっての直立二足歩行の意味：ウォーキング・セミナー（京都文教大学学生の世界一美しい歩く姿）
- (4)現代人と高等教育の意義

である。これらは、大学生の人生の前半部分に深くかかわっている。生殖は学生の存在の前提であり、親の何らかの育児環境が学生の現在をかなりの部分で形作り、人類が他の生命体の上に「君臨」している事実を学生も共有し、そして大学で培った何事かを引っ提げて否応なく社会にうってでなければならぬ。各シンポのコンセプトを簡単に紹介しよう。

- (1)人類の始まりとしての性文化（2012年12月1日実施）

人生はいつから始まるのであろうか（人の始期）。それは、母親の胎内から出た瞬間からであらうか。法律的な権利主体としては、たとえば、民法第886条「胎児は、相続については、既に生まれたものとみなす。2 前項の規定は、胎児が死体で生まれたときは、適用しない。」とあるように、母親の胎内にある段階で「人」と認められる場合があるので、胎児も「人の始期」にかかわっている。しかし、それよりも前に、卵子と精子とが出会って受精しなければ出産もない。さらに、卵子と精子とが出会う機会を設けるとなると、それは、たいていは、避妊しないで男性の「成り余る所」で女性の「成り合わぬ所」をふさいで、男性が射精する行為を伴う。人間の一生は、受精を目的とした男性と女性の

性の交わりから始まるといってよいであろう。

ところが人間の始期にかかわる「性行為」は、日常生活では「秘すべきもの」とされがちである。そもそも性行為を連想させる生殖器はさらに隠されるべきものとされてきたので、性行為など公にはできないものとされてきた。システムナ礼拝堂の祭壇に描かれた「最後の審判」の裸体画に、ミケランジェロの死後、腰布などを書き加えるのに雇われたのが、彼と親交のあったダニエレ・ダ・ヴォルテッラである。気の毒に彼はその後、“Il Braghettonne（ズボン画家）”のニックネームで呼ばれることになる。いうまでもなく、ミケランジェロは、この裸体画を見る者に「性行為」を想像させようとしたのではなく、神がそのように人間を創造したことを再現したに過ぎない。

創造主が人間を創造したという信仰の世界では、ギュスターヴ・クールベ「世界の起源（L'Origine du monde:1868）」（オルセー美術館所蔵）の、女性の生殖器と腹部および乳房のみをキャンバスに描くという他にあまり類を見ない作品は衝撃的であったに違いない。この絵も当然のようについ最近まで権力に呪まれた歴史を持つ。1996年の常設公開以来、同作品は、近代絵画史上でゆるぎのない評価を得ているのだが、“But it still raises the troubling question of voyeurism (<http://www.musee-orsay.fr/en/home.html>)”とオルセー美術館の悩みは尽きない。

「ボカシ」などの技術が開発される前の、生殖器や陰毛がはっきりと写っている写真は、日本国内で販売される前に、政府職員がその部分をマジックで黒々と塗りつぶした。来る日も来る日も朝から晩まで、それを行っていた職員は、職務とはいえ楽しいものではなかったにちがいない。

写真や絵画だけではない。『チャタレー夫人の恋人』(1957年最高裁)や『四畳半襖の下張』(1980年最高裁)といった小説も、「いたずらに性欲を興奮または刺激せしめ、普通人の正常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義観念に反するもの」として、刑法第175条「わいせつ物頒布等」の罪が適用されて、作家や出版社が罰を受けた。活字ですら「わいせつ」と断じられ、生殖器や陰毛がはっきりと見える図画も市場に出すことができなかった。ましてや男女の性行為が描かれている「春画」などの図画がひろく人の目に触れることなどもってのほかだった。

裸体を芸術作品の対象とする歴史は、古い。しかし、性行為を題材とする「芸術」作品となると、日本の浮世絵春画は世界でも第一級の文化的価値があつて並ぶものは他にないといえよう。クールベの「世界の起源」にしても、女性のみを描いているのであって、そこには「男」がいない。男がいなくてどうして「世界の起源」なのか。まさか「処女受胎」を彼も信じていたのではあるまい。クールベが精々のところ明治元年の作品であつたのに対して、はるかそれ以前から描かれてきた日本の浮世絵春画は、男女の交わりのみならず、交わりの日常をも構図に取り入れるなど、作品の一つひとつの文化情報において量も質もクールベを圧倒する。浮世絵がヨーロッパ近代絵画に与えた影響や、春画がピカソの創造意欲を大いに刺激したことはよく知られている。この春画の出版も、1992年の『秘蔵浮世絵名品集』(学研)までは、性器の部分が「白抜き」などでわからないようにされていた。男女の表情や身にまとっている衣服、そして背景にある日常の風景がきわめて精巧に描かれているのに対して、絵の中心にある部分が「白抜き」や「黒い丸」という想像力を刺激する実に「ユーモア」に溢れた絵柄である。

われわれの祖先が創造主の教えに反して「知恵の樹の実」を口にしたためなのか、人間には逞しい想像力が備わっており、それをもってすれば「白抜き」「ボカシ」など何ら障害でもなく、「黒塗り」ですらそれを埋める画像処理能力を人間は脳内に獲得している。「隠す」工夫は、人間の知的能力を高めるために大いに貢献したと

いえよう。だが、不十分な情報しかない状況で発揮される逞しい想像力は、人間を必ずしも幸福にしてきたとはいえない。とくに権力や権威が社会の安寧秩序を「守る」という大義名分で人々に不十分な情報しか与えなかったことで、社会の安寧秩序を「破壊」する皮肉な結果に終わった歴史的事実を上げることは難しいことではない。ましてや、「春画」が秘すべきものであるかどうかの判断に権力が介入することで、情報秘匿が権力の当然の特権であるとの政治文化が形成されるのであれば、それは、社会にとって大きな不幸の源となる。

もちろん「春画」を公然と見せられて強い羞恥心や不快感に襲われる人も少なくないであろう。ヘアヌードが「解禁された」からといって、それを総合週刊誌のグラビア写真として掲載し、またそれを通勤電車のなかで公然と広げてみる無神経な輩の存在は、権力に情報秘匿の口実を与えかねない。性文化と節度は、権力によるのではなく、人々の日常生活のなかで自律的にはぐくまれるものでありたい。これがこの企画のコンセプトである。

(2) 幼児期における音楽環境 (2012年12月8日実施)

「母親は本能的に子育てをすることができる、という考え方はナンセンス」は、ニュージーランド総督夫人ヴィクトリア・プランケット氏の言葉である(松川由紀子『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館、2004、p.2)。彼女は、20世紀初頭のニュージーランドで、母親と子どものための支援団体(現 Plunket Society)の発展に寄与した。同国では、出産や育児への金銭的な支援が万全であることに加えて、子育てに疲れた親(とくに母親)が休息する施設が整えられているなど、子どもを育てるうえで世界でも最も行き届いた体制にあるという。

ヨーロッパのいくつかの都市で乗った電車やバスでは、大きな乳母車を折りたたむことなく乗せることができるスペースが用意され、実際に乳母車が乗ってきても、他の乗客はあたりまえのようにそれを受け入れ、子どもや親に向けられるまなざしもとても優しいものであった。

ひるがえって、日本の場合はどうであろうか。インターネットのニュース・サイトでは、通勤や通学の時間帯を外していても、電車にバギーを持ち込む行為に対して、たとえ折りたたんでいても「他人の迷惑も顧みない無神経な行為」とする批判の声がかなり寄せられている。そこには、子どもを育てることに対する「リスペクト」の感情もかけらもない。

保育所や幼稚園での「命の水」をご存じだろうか。夏場など、連れてこられた子どもがぐったりしてどうもおかしい、軽い脱水状態にあるようだ、と施設側で判断し、水を少しずつ飲ませると、ようやく元気になる。保育所・幼稚園では、食事や水も摂らせずに子どもを連れてくる親が珍しくない。小学校でも、朝食抜きの子どもの多いので、「早寝早起き朝ごはん」の標語が声高に語られているほどである。大人であれば、朝食を抜いてもなんとか午前中は頑張っているだけの体力があるだろう。しかし、子どもにはそれだけの体力はない。朝食抜きの子どものは、午前中はぐったりとして身体もあまり動かさず、授業にも集中できない。こんな状態が保育所・幼稚園、そして小学校まで続けば、きちんと育てられている子どもとの間に、学力も体力も精神力も格差が生じてしまうのは当然である。さらに、DVも稀ではない。

児童相談所に寄せられる虐待の相談件数は、減少する気配がない。もちろん、虐待そのものが増えているのではなく、従来から存在していた虐待が「顕在化」したに過ぎない、むしろ現在のような児童虐待への抑制システムがなかった過去の時代よりもまだましになっているとの見方もある。だからといって児童虐待が問題ではないとはもちろんいえず、「心中」以外で子どもを死なせてしまうケースで、加害者の多くが「実母」とであるという現象にもっと注目してよい。「自分のお腹を痛めた子どもを母親もいつくしむはずである」とは、母親に対する「過剰な期待と幻想」である。その「過剰な期待と幻想」に安住しているのが、父親たる日本の男どもである。彼らは、個人差はあるものの、平均値でみると先進国で最も家事を手伝わない連中である。

保育所に子どもを通わせている母親と幼稚園に通わせている母親は、人生観が違っている。前者の中には「専業主婦願望」がありながらもそれが果たせない母親もいるであろう。彼女たちにとって、幼稚園の母親は羨望（嫉妬）の対象である。他方、子育てと職業を両立させたいという強い欲求をもちながらも夫やその家族との関係で専業主婦を強いられている幼稚園の母親にとって、保育所に子どもを預ける母親は羨望（嫉妬）の対象である。女性は、母親になった瞬間に、本来の子ども、子どものような夫、うるさく言う姑の八方ふさがりの中でもがき苦しんでいる。母親同士でも緊張が無関係というわけではない。かくして、子どもがまつわりついてくると、我慢しきれずに子どもにつらくあたってしまう。過去から現在にいたるまでの日本の母親の置かれている立場はあまり変わっていない。

少子化対策を「児童手当」などの金銭的対策で良しとして、子育てに対するリスペクトを醸成しようとはしない社会では、女性も、ストレスがたまるだけでの出産と育児に踏み出そうとはしない。子育てと音楽とを組み合わせたこのイベントは、子育てにかかわっている親（母親も父親）に対する敬意として企画された。

(3)人類にとっての直立二足歩行の意味：ウォーキング・セミナー（京都文教大学学生の世界一美しい歩く姿）

陸上短距離選手の走る姿に魅入られる。ボルト、ジョイナー、福島千里の各選手は、一切の無駄を排した「合理性」という美の極致にあるといって良い。小学生に合理的な走り方を教えると、面白いほど記録が向上する。走る姿だけが美しいのではない。2013年のミス・ユニバース・ジャパンに選ばれた松尾幸実さんに限らず、各県の代表者たちの、背筋を伸ばして颯爽と歩く姿も魅力的である。スポーツ選手やビューティ・コンテストに出場する人々もさることながら、普通の人でも颯爽として歩く姿は美しい、何よりも、人間としての魅力も増すというものである。

哺乳類動物で直立二足歩行を普通の移動スタ

イルとしているのは、いうまでもなく人間だけである。この人間が、両手を飾り物にしたならば人類の歴史は大いに違っていただろう。だが人間は、両手を飾り物にしなかった。道具を活用し、道具を作るために両手の機能を発達させ、その結果として文明が発達し、人類は、地球の生命体の頂点に立つことになった。しかし、払った代償も小さくない。

人類は、他の多くの霊長類のように高い木の梢を自在に移動する能力を持っていない。内臓の多くを受け止めるために発達した骨盤底骨がかえって胎児を「未熟な状態」で出産せざるをえなくし、他の哺乳類と比べて子どもが自立するまでに長い時間がかかってしまう、というよりも親は子どもに長いこと寄り添わなければならない。骨盤が収まっている「腰」、すなわち「身体の要」にかかる負担の結果として発生する「腰痛」、さらにその下の「膝」の障害は、最も大きな代償であるかもしれない。現代人の労働が椅子に座って行う作業であることも、腰に大きな荷重をかけることになり、当然のように腰には良くない。なによりも直立姿勢のバランスを保つことの難しさは、加齢による問題を引き起こす。つまり足腰や反射神経の衰えによる転倒事故である。

直立二足歩行によって人類は文明という大きな価値を獲得することになったのだが、上記のような代償を伴っている。この負担を軽減するために、ジョギング、ウォーキング、ストレッチ、筋力トレーニングなどなど、現代人は涙ぐましい努力をしている。筆者の最も得意とする負担軽減策は、チャンバラ小説を好きな音楽を流しながら横になって読み耽ることなのだが、結果的には運動不足となり、むしろ負担を重くしている。そこで、身体に最も負担のかからない直立二足歩行法を身につけて、美しく颯爽と歩くことができれば、心身ともに前向きになること請け合いである。この発想に基づいて、神戸美人塾を主催する三浦さやかさんを講師としてお招きし、本学キャンパスを颯爽と歩いている学生で溢れかえるようにする。これがこの企画の趣旨である。乞うご期待である。

(4)現代人と高等教育の意義

教育とは、人間の潜在的な可能性を伸ばすと同時に、それをスポイルする。子どもたちののびやかな絵の才能は、見た目は上手に見える、しかし不自由で窮屈な絵を描くように指導されて、次第にしばんでしまう。楽しいはずのお絵かきが細々とした規則に縛られて、子どもは嫌気がさしてゆく。芸術大学で絵画教育を受けた者は、「メシを食う」ために教わったことをすべて削ぎ落として自分の才能を再発掘することから卒業後の創作活動を開始するという。卒業するまでは、とにかく「良い子」でなければならないのである。

教育は、子どもたちの自然の可能性をのばすための手伝いであると同時に、「大人の評価基準」で「良い子」の枠にはめる行為である。大人の評価基準で高い得点を得た者が社会に受け入れられ、それが低い者は社会でそれなりの扱いを受ける。「入試難関校」に入ることは、社会に受け入れてもらうための「パスポート」を得るようなものだから、多くの親も子もそのために他を犠牲にしてまでも必死になる。その結果、多少「面白みに欠ける人間」になったとしても、「良い子」になる努力を欠かすことができない。

アメリカでは、高等教育に期待される「良い子」の基準は、勉強の中身に加えて、集中して勉強に長時間取り組むスタミナの程度でもある。企業などの組織が外部から人材を受け入れるときの重要な判断基準の一つが学位と資格であり、そのいずれもが相当の時間と労力を投入しなければ獲得できない仕組みになっている。したがって、学位や資格を有していることは、その実力もさることながら、努力する根性や忍耐力も身につけていると評価される。かつてアメリカ国内の大学を卒業した人材を募集するにあたって「高い日本語能力」を条件としたアメリカの企業があった。その理由は、「あんな難しい言語を習得したのだから、相当の忍耐力を備えているに違いない」であった。

日本の大学では残念なことにそうはなっていない。大学受験で「面白みに欠ける」ことになった人間がクラブ活動、アルバイト、遊びなど

でいかにリハビリに励んだかが評価され、勉強は二の次である。実際はそうではないのだが、こうした誤った風評被害に大学は苦しめられている。かつてある大学の法学部で、数名の学生がある科目一つで卒業できなかった「事件」が起こった。メディアの風潮も、学生への同情はあっても、出来の悪い学生に単位を与えない教員と、その学生を卒業させなかった大学側の勇気を讃えるものではなかった。よくよく聞いてみると、その科目の担当教員は、最初の試験で不成績であった学生を救済するために幾重にも措置をとっていた。しかし、不成績の学生を「下駄を履かせて」合格させる無責任だけは避けようとした姿勢が批判されたのである。日本では、「大学で学ぶことなんて社会で何の役にも立たないのだから、1科目くらいで卒業させないことは許しがたい」とされてしまう。

シンガーソングライターの長久保徹氏が“free”と“Arbeiter”を連結して「フリーアルバイト」を造語したのがバブル景気直前の1985年。その意味は、「自分の夢を実現するために頑張り続けるための仮の職業」であった。

フリーアルバイトは、音楽活動などで夢を追い続ける若者たちによって圧倒的な支持を得た。だがその後、リクルート社のアルバイト情報誌の編集長・道下裕史氏がそれを「フリーター」に縮め、広辞苑の「定職に就かず、アルバイトなどを続けることで生計を立てる人」の意味として使われるようになってから本来の意味からずれていく。バブルがはじけて就職の超氷河期には、「正社員」採用となることができなかった人のための「慰め語」となり、さらには「自分の夢を実現するために頑張り続ける人」の意味から「自分の夢が何であるかを探す人」になり、そして「面倒くさい仕事を避けて頑張らない人」のための「言い訳語」として使われるようになっていく。大学もその言い訳に加担していないことを祈って、この企画を考えてみた。

自然の可能性を伸ばすことと良い子になることが矛盾するとはいえない。社会に迎合するのではなく、教育のあるべき姿を社会に示し、学生の個々の才能を開花させる手伝いをするのが大学の役割であろう。その役割を模索することが企画の意図である。